



大正時代頃の木曽谷の御料林における小谷狩風景。
裏木曽でもこれに近い風景が見られたと思われる。

水を利用して川の本流へ木材を運ぶ「小谷狩」ですが、裏木曽の場合は付知川下流や木曽川本流まで距離がありますので結構な長丁場となります。

「裏木曽」その十一 小谷狩③

今は昔、山村に暮らす人々とその生業としての
林業を当局秘蔵の写真とともにご紹介します。

シリーズ

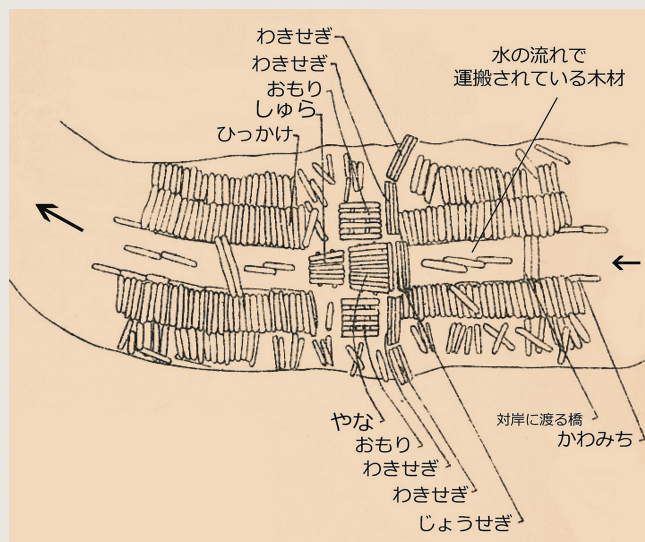
秘蔵写真

今は昔の林業

第47回

中部森林管理局総務課

井上 日呂登

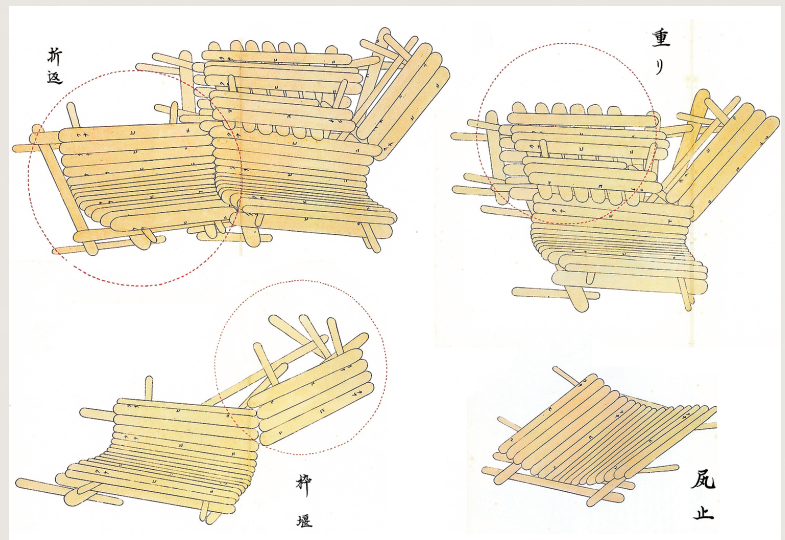


「小谷狩」の俯瞰図
(帝室林野管理局発行
「木曾御料林之造材運材」を元に作成)

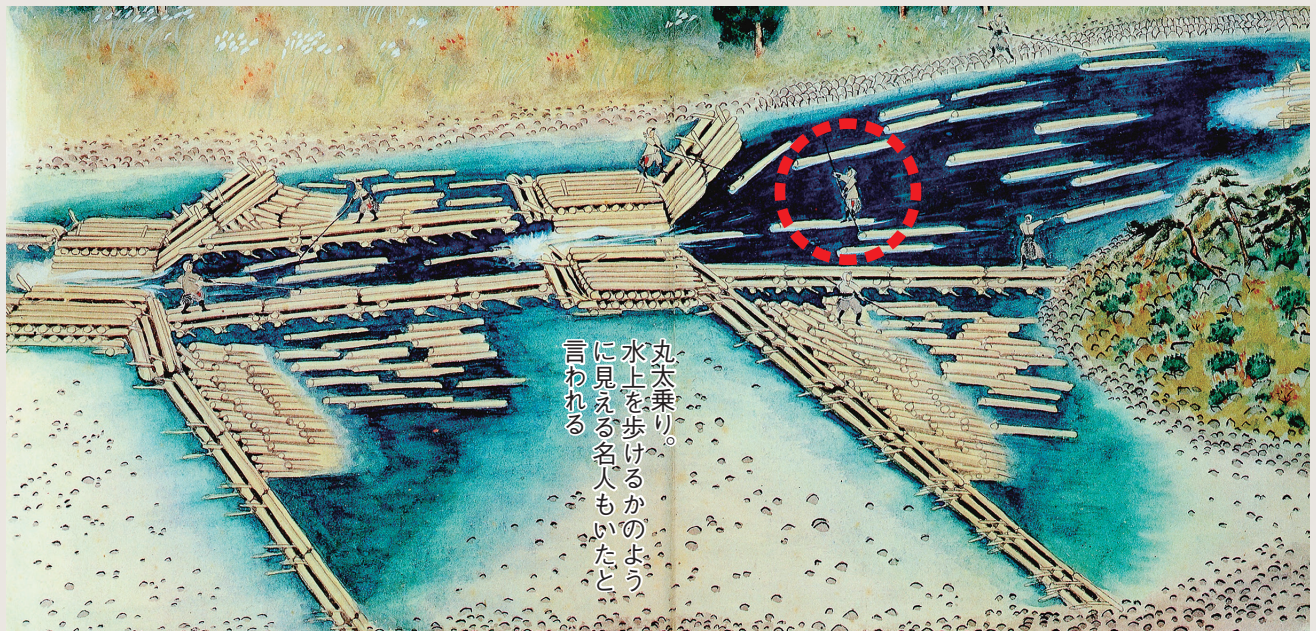
「小谷狩」に用いられる施設は大別して沢や川の水位の高低をコントロールする「堰」と、丸太が散乱して流れないように誘導する「川路」からなります。

設を造ってから一気に運びますが、「小谷狩」の区間は長いので人も運材施設も全区間に分散して配置することはとてもできません。このため運材の先頭の「木鼻役人」が指揮する組が流れてくる木材で運材施設を構築しながら、最後尾の「木尻役人」が指揮する組が運材施設を解体し、全体として徐々に下流へと進んでいきます。

これらは地形や水量に合わせた各部位を組み合わせて造られますが、施設を構築している材料は基本的に運搬している木材そのものです。「木鼻役人」達は次々と流れてくる木材を見極めて独特な構造の運材施設を組んでいかねばなりませんし、「木尻役人」達は水の力がかかっている運材施設を安全に解体しなければなりませんから、特に技術優秀な者が選ばれた（第四十六回参照）というのも頷けるところです。



「付知川に於ける材木伐出の沿革と絵解」より
「堰」の各部位の構造図
現場では設計図など無しに経験と勘でこれを組んだ。



急な大雨が少ない晩秋から冬に行われた「小谷狩」ですが沢や川の水量の変化で危険となることになりはなくなり、水の力を利用する運材方法だけにそのコントロールには細心の注意が払われました。



大正時代頃の木曽谷における小谷狩風景

ここで紹介している写真は、当局サイト「モノクロ森林紀行」で紹介しております。これは、カラー写真のない時代へ時を超えて！むかしの写真を紹介するサイトです。
当サイトへは、コードを読み込んでください。

